

飛登世發船

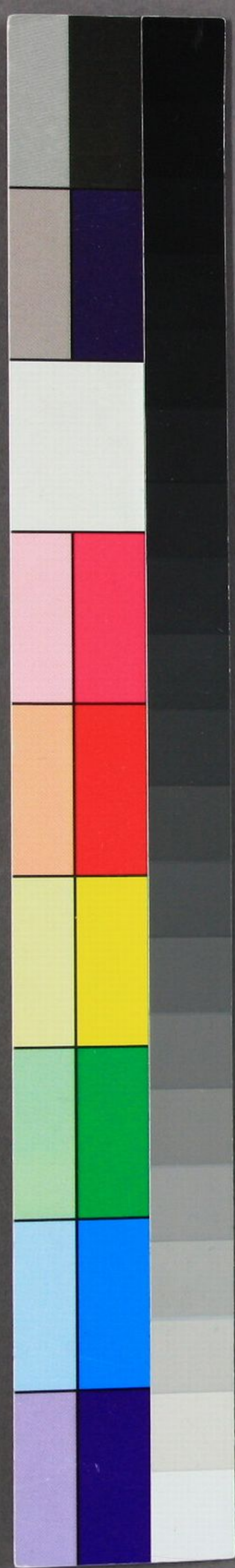
單

特別

イ 4

3159

B10



14

3159

B10

海量師著

乙子卷



国堂

書林清燕堂



一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

梅溪海量

Handwritten cursive text on the left page, consisting of several lines of characters.

Handwritten cursive text on the right page, consisting of several lines of characters.

ひとね花

櫻溪 海量



畿内

山城 大和

下加茂よりあつぎへよめる

千子終りの家の神垣をわたりあやの尊の神垣

嵐山の櫓をくぐり

足曳の嵐の山の櫓をくぐり登りに逢ひよめるやと

宇治よりあつぎへよめる時

ふり郷の遠江の海の水出の宇治川原を過ればあや

武夫の宇治川より登るよと逢ひよめるやと

吉野山のちかさを

花をみ 瑞雲にたふさふさ 吉野の山 此の山は春はあま
と吉野の山はあまふさふさ 宿をみ 杉木は盛り 厭うたえ 為
蝦蟇く 吉野の川の底は清き 岩の榊の葉はうさつ 水は

大峰のまほしき河

雲霧の立ち重なりて 大峰の人も 怪らしむ けしきに
朝霧の霧の晴きに 大峰の谷ぞ 中津川をきき なが

多武之峰よのけりて

家づとに 楊梅をち 手をり 多武の山 水清くは 花
二上山のまほしき

見渡せば 神をい 立てり 久き 天の香久山 雲根火 舟梨

春日山を見り

古郷の 奈良は 都なり 春日山 人も尊し 神代のは
春日の 祭りは 夜旦満つ ともけり 傳言も
大宮の 遷し奉るを 或るも

朝日したまはる 神のい ども 吉野のまほしき なる
神せ 月のも ちめ 泊瀬のまほしき なる 河の

隠口と 初瀬の 川のまほしき なる 下る 吉野の

香久山へのちかき

久方之 天の香久山 上り 立ち見 せは 神代のおり なる

河内

片野なる 津田の 里なり

嵐山宮望

霞進



旅枕数多重ぬり鶉啼くも病状那邊の風之寒さに

攝津

住之江よあまの江

住の江は浦曲の松すゝまのこに神をいへてゐる女は玉垣

住の江の沖吹く風は雲をひいて淡路のち場は船の寄る見ゆ

天王寺もやとりにて

葦屋ぐちの難波の寺の存をたもたぬ水はひりひり

布引の湯をいへてゐる

灘津瀬を吾来とていへる岩のくはくはてゐる

西の國よあまの江の時流無の海にたどりて日

数をいへるす入て吾こあまの江よ名をいへ

も浦邊のいつなふれと古へり人のめでたや

こやあまの江無明石よあまの江をいへる

とに大方は人の名をいへる心をとむる

かめおのれ思ふとおやも海をいへる

の廣くうちをいへる紀の國千野をいへる

あまの江のいへる又常陸の筑波をいへる

と鹿島香取は海をいへる何よと肥の國

かみ湯は嶽より嶋原天草の島をいへる

岡下西の唐津は海をいへる野をいへる山

の七里はの波路をいへる出雲の國

かみ三穂ヶ崎の九里はの海をいへる

筑紫之國の箱崎の海に海の中道・小等の
所にも善しといふも風の音浪をせむかの
すけりし事して心をとまらむるも今世はよし
てんさぐんれは東に和泉より紀の玉より西
は播磨の崎とよし出南淡路崎のいと遠く
四ツの國の高嶺の建つこ水も多し井崎山
うちわをぬきしるるもかき後一か心地りきは
まに都人なるもの稀よ来くのそおのしるる
めて思ひきりてよおのしるる名も高くとちけ
ちはうべりかきしるる

おほ海に河のそにてて婆の川をみるありて何處須磨の

東海道

伊勢

五十鈴川のやちりまて

おちまき地瀬の音あり音はあまの川心の聲とそ記

外宮の前山の様を

久のよ天は赤祢の前山のちさらのまほひ花はゆら

二見の浦を

五ヶびやいぬの浦よりちさき母 衣ぬらうは

朝熊山よのりり

おのの峰よりたれに富士のぬいりり おのの

鈴鹿山を越ゆる

鈴鹿川八十瀬の水の急なる濁水なりなる音の如く

尾張

熱田之宮より

また鏡てる日れぬを漏らぬて穀田のあけり

名古屋より大野の海へわたる時

あすの朝船こもゆる知多の浦は何もの

遠江

荒井のあけり

若りれる世よりあけりも超えあひぬ浪の荒るの

駿河

富士の高嶺を

日の本はあけり玉のあけり

久のつ天津ぬそら行く雲上より入の

諸越の人よ河をわが舟にのりて沖の

はえ寺ののりて白の入りて富士の

しづねのいづこにえわのふとも伊豆の

時の沖中より

はえ海霧のくちをわが舟にのりて

甲斐

沖津の驛より

山越のあけり

中々のあけり

身延の山よりなるの山をさくら山といふ
えあつたけい

山菅の山延の山よりなるの山をさくら山といふ

相模

箱根山を越ゆる時

旅人のゆきうしきまゝに足柄と函館の山を越ゆる

江之嶋の山よりなるの山をさくら山といふ

行方ゆきまひの山をさくら山といふ

汐漕ちて船をこいでゆく

朝宵の潮干汐元と徒家ゆき船をこいでゆく

鎌倉よりして船をこいでゆく

薪樵る鎌倉山の山をさくら山といふ

武藏

出づる山

武蔵野の山をさくら山といふ

月影の山をさくら山といふ

月影の山をさくら山といふ

下總

香取の浦の山をさくら山といふ

菅原の山をさくら山といふ

常陸

筑波根の山をさくら山といふ

方より富士の高根雲井くくくく東の方は大
海ゆきりけり 林森く 鑑なぐ 鹿島香取の
水海めくけり 利根川鬼怒川は流せきとて
こころの國の高根のや井もくくくくくく
つらすくくくくくくくくくく

山高いひのちのちまかせくくく海山川いひのちのち
鹿島外の大船津いひくくくく

何れもかたの時もくくくくくくくくくく
久慈川をくくくくく

久慈川のながれもくくくくくくくくくく
東山道
久慈川のながれもくくくくくくくくくく
みやくくくくく

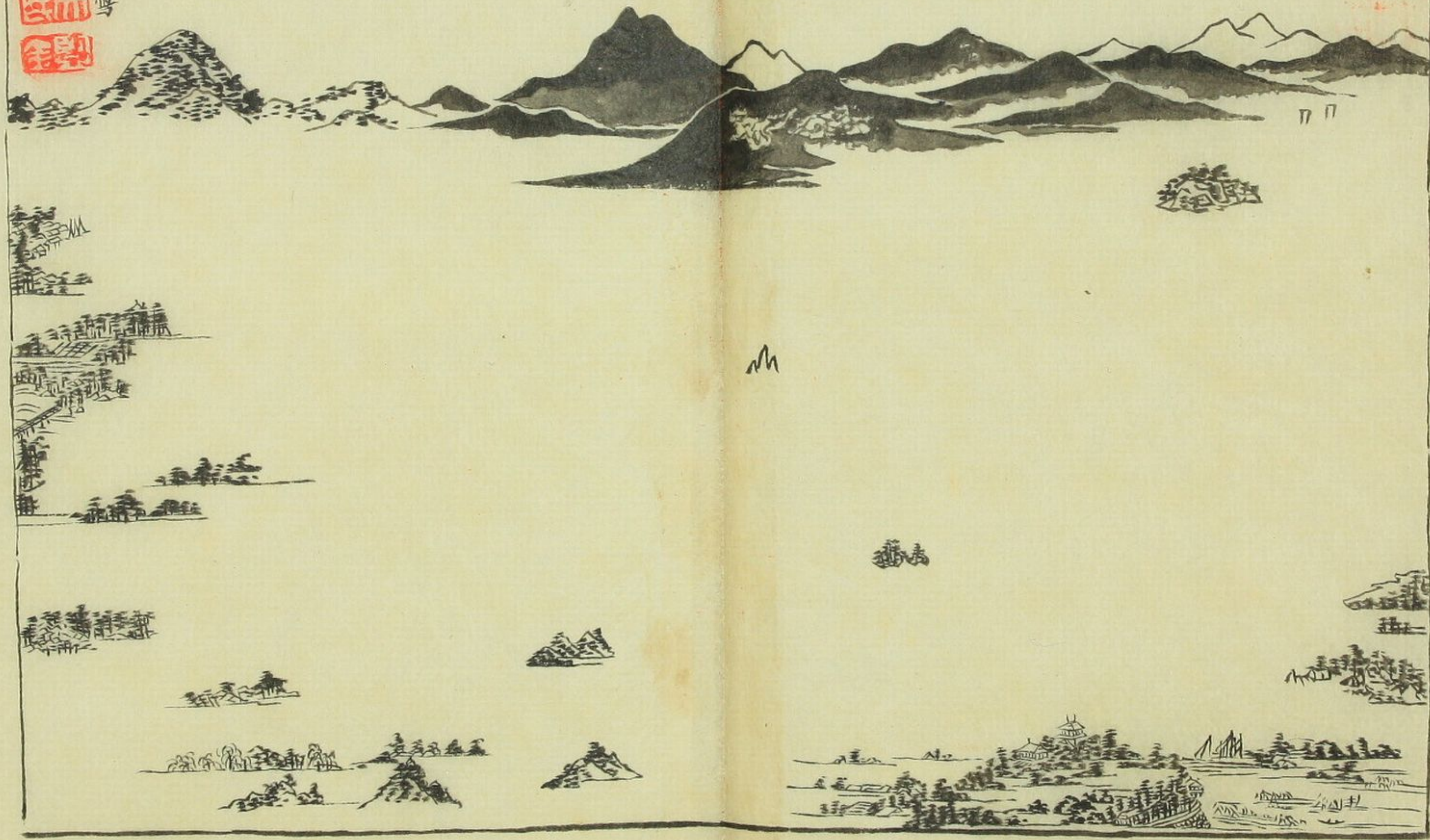
近江

彦根山のふもとくくくくくくくくくく
とくくくくくく

岩橋のあまの國のくくくくくくくくくく
さかきり 海もさやぐ 天つくくく 彦根の
りきり 朝よむにうち出くくくくくく
午のぬれもくくくくくくくくくく
八重もくくくくくくくくくく
りかおのくくくくくくくくくく
何まつくくくくくくくくくく

琵琶景勝

天氏寧
金



遠くは海原の 世良の高根と 汐船のなるを
そり 飛風の 伊波のふけの 山と 那を
いみ 美かひの 多りの 栗の 山高く 何ら
そひくても 大空の 露の 外ひきと 多る
か入る 青の 海を けし 花咲き 芳人も
と 露の ちあつて 照の 月の ちあつて 秋の 露
遠くは 千種花を 沖遠く 鶴もあ
いり 芦遠く 水多し ちあつて 國の ちあつて
いふ ちあつて ちあつて ちあつて ちあつて
たぬ ちあつて 海を ちあつて ちあつて
朝の ちあつて 何れも ちあつて 海八千の 水に

うら ちあつて ちあつて ちあつて ちあつて
ちあつて ちあつて ちあつて ちあつて
ちあつて ちあつて ちあつて ちあつて
ちあつて ちあつて ちあつて ちあつて

何れも ちあつて ちあつて ちあつて ちあつて
美濃

養老の瀑布

多度山の ちあつて ちあつて ちあつて ちあつて
も ちあつて ちあつて ちあつて ちあつて
木曾路を すすむ 時
五百重山 千重の ちあつて ちあつて ちあつて
おつら 橋を ちあつて ちあつて ちあつて

大野のまのれの横山あめのかのこしきよきふく
廣瀬の山中あめのかのこしきよきふく
池田のまのれの横山あめのかのこしきよきふく

信濃

浅洞の嶽よるまはて

くつし黒のひの黒いまはてあめのかのこしきよきふく

姨捨のまのれのこしきよきふく

あがすての山あめのかのこしきよきふく 袖おび

上野

刀禰川をあめのかのこしきよきふく

とね川の水あめのかのこしきよきふく

下野

二荒山ふらあめのかのこしきよきふく

みずのあめのかのこしきよきふく

陸奥

阿武隈川をあめのかのこしきよきふく

陸奥のあめのかのこしきよきふく

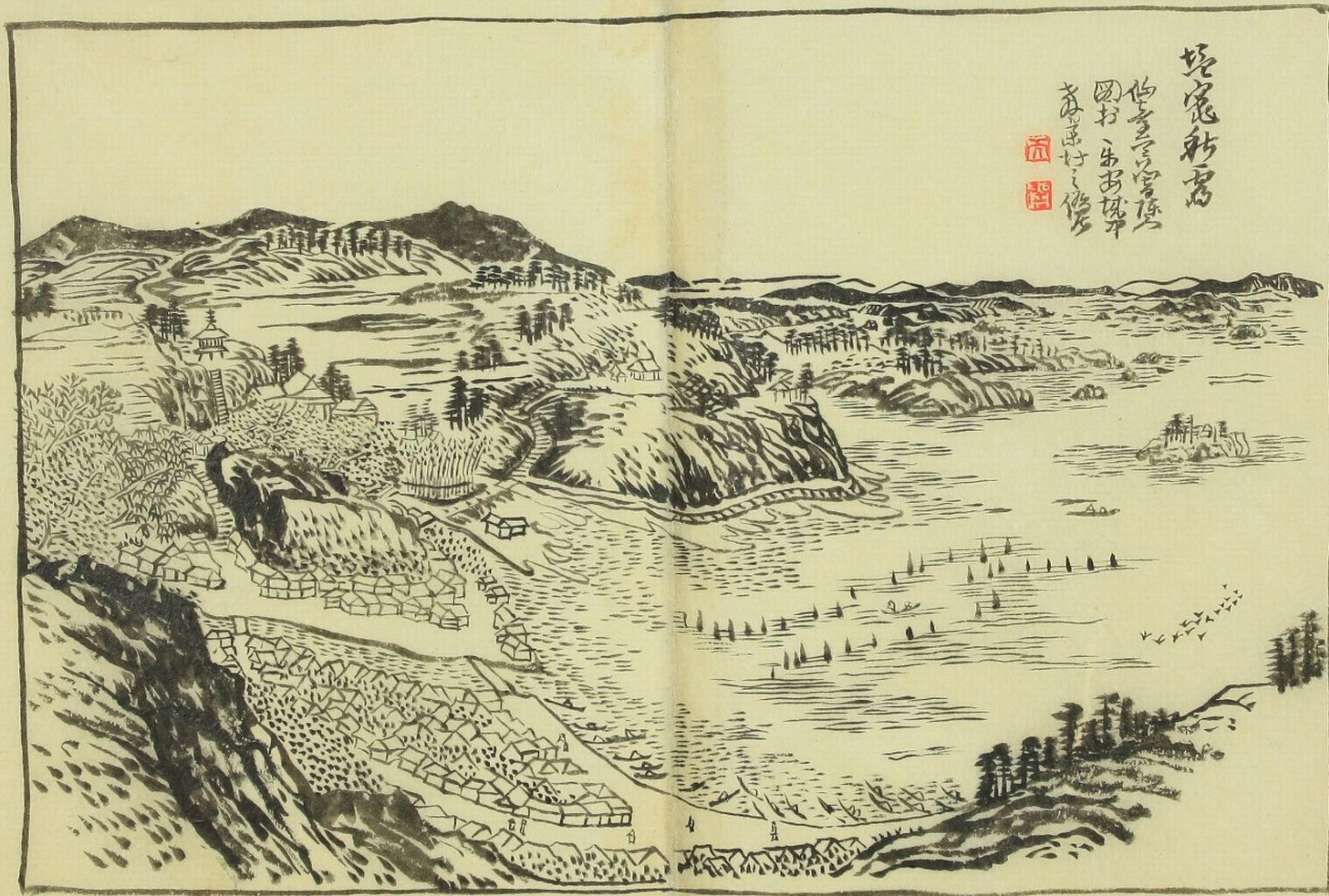
信夫山のあめのかのこしきよきふく

古御をや井のあめのかのこしきよきふく

鹽竈の浦をあめのかのこしきよきふく

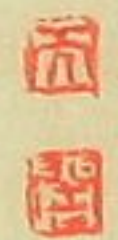
喜のあめのかのこしきよきふく

松島まつしま



塔院新書

伯言言官孫
國打朱安城
蘇東村之修



天地のあやしきことのうらむ解りハナチは島にぬるおりの
みづめぬるあやしきものぬ松島や雄島の崎の世さいのふえ
あつぬくよまへすもあらまむ松島や雄一もの崎よ
北上川のわきをいこい
ふらる白雲

陸奥の北の川よゆきぬの解りあつぬのひら
盛岡よ日かへて岩手山よめで

陸奥よ吾来てぬぬのよのまよまえぬいこい
出羽
出羽の白雲

出羽の象潟の蚌満寺の中より見るといふ
西東の二里ありに北南のふち
町はのさけ路の敷の半よのい何れといふ

種この木とも生いしち草深くあまの西
のあひくに鳥海山のいこい立ちこる林原
まて二里はのい何れといふ

象潟の水邊はの鳥の雲の流り
坂田浦よやうと松の彼に見あるおふり
廣さわりの解のぬきぬのありちよ最
上川の末ありといふ

廿の舟のいこい何れは最上川にぬるの解り
北陸道
越前

象潟の信のいこい

つめりし海なる白波いさらしめ(はらばら) はらばら

加賀

白山シラをさへし

しなはるる越の白根の白雪ふ留めし日句あはれし
こころは夏の日すらも白山は流るす流のまじり あはれ

越中

礪波山を越ゆる時西りし夕のなみ

焼太刀を礪なごの山を峰やちの雨雲ふちかみし はらばら
礪波西りし越えし山雨時水てまよの山遠く月照り

射水川を船とてちの河掣の軍の如し はらばら

射水川流る氷のまはれぬ はらばら

射水川に流る水いふ谷のふくみ はらばら

立山の雄姿ふすくる河

常夏の雪ふりおける立山たむなり はらばら

久のふら雲のへりあふむる高き立山 はらばら

越の國の中お田の南へ白山と立山のありて北 はらばら

海の近は水い川の流き早くて はらばら

ハツあるハツもあつた はらばら

うき はらばら

河 はらばら

河 はらばら

けい はらばら



五山遠望岸野寫



かゝる川まで

立山の峯をなみ流る水は川の瀬音を

布勢川まで

布勢川は流るの音は水の音に似せし音に似せし

婦負川のあつらひにて

かゝる川も取らぬなまき流を綱引まはして

越後

信濃川のあつらひにて

信濃川は流るの音は水の音に似せし音に似せし

山陰道

丹後

橋立ちて

冬への雲井は續く大海の浪路のわが秋天の

但馬

出雲を月を照らす時

城の崎にいて陽をいつこぬと玉のやわらぬ

出雲

多く端のわらふ時

出雲の海に身をまかせし時

八雲山まで

八雲山をなみ流る水は川の瀬音を

八雲山まで

千糸女の髪いそぎよき糸女の夢あはるそめり
鶴山よ

露の松次風の音高きこえり一年たてぬ

ゆりのみ境のあはれ

ゆりの海沖のむじろ夫つよ白き人おのづかの名

石見

かき山のたつたつたのるよ月廿六日

なつたつた

石見のあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

山の端のつよ月を古郷の人をもとめてあはれあはれ

心ありてつよ月を古郷の人をもとめてあはれあはれあはれ

高津

高津のわねのおはるる高津のつよ月を古郷の人をもとめてあはれあはれ

高津

はるる吾来てあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

やまの嶽の本なるあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

山陽道

播磨

明石の浦

あまち月明名のあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

曾根の松

あまのつよ月を古郷の人をもとめてあはれあはれあはれ

浦松

室の津よりわたりて海にわたる時

けりおのりて一島のありも島嶼を尋ねて来つる
家崎の海を渡る川を渡る一々重なる雲平遠に
つゞきを行くものもなほくからよの路の白霞

美作

血山の麓をすべりて

美作の久米代四ツ下なる一神さびしくそり久米の

安藝

巖鳴りありて

あゝ川原の流のみつおと大との波をみちる朝骨
廣島の古城より三千里のり北の方より金社

山福王寺より小寺何ぞ尋ねありてけり
伊豫物語の業平朝昔の何れもも岩の
そがりのありていふは伝説をいふなり
のなりし歌をいふは青き岩をい
はみちの結のありては歌をいふは維高の白雲
よ奉れりともふその石なりとも傳へる故
かゝるをいふはありては歌をいふはなり
あゝりふいふは何れありては歌をいふはなり
たかひのありては名の色は青きとありては
めいふはありてはありてはその奉りては
ふまわりてはありてはありては其折なり

あつては地とてあつた

又わが男はふもふもいふもいふも名もさる人とはあつた
あつたあつた

長門

長府を過ぐ前田より里よりりひるふかのなす
東ののつた白波のちちちちこころに灘津波の
かくつりひるもなりのありりち駭きしてしる
ふ川よりと関ふし瀬戸の汐の引くるもそり
とめて湖のりまやひのいふもいふもこころを
知事より汐のあつり赤河の関より一里のり
さて汐の引く時あるる関より二十ち何れや
七里東よりす水備後の鞆の浦よりはあつ

三十里何れより七里東よりす水上の関より
あつ伊豫の灘よりすれりる鞆の浦より
八五十里けのり東よりすれり播磨の灘より
経て阿波の路津よりすれり早鞆の浦より
あつ灘よりすれりひのなる早鞆の浦より
とつりひ十何れはあつたあつたあつた
一里よりあつたあつたあつた

山川の瀑やなすも早鞆の浦や早鞆の浦や
早鞆の浦や早鞆の浦や早鞆の浦や
南海道

紀伊

熊野の浦とて

こ熊野の濱邊におある濱木綿のよもぎの如く燃て
千里の濱より残りてあり千ひろの濱とて
出るより入るてさなるよもぎのよもぎ 千百里の濱とて
月影

和歌の浦とて

和歌の浦よりちとていふこちの沖津島根は波立
玉もゆるわりの浦ひのぬなを記さこころ深し
あはれ
沙舟

玉津島とて

おまべより浪のよめたる玉津島つみみてつとよする
雑賀の崎よわりのりりて

あちれすむ沖津島山の岩より水とてこころ深し浪の
音のよめたり

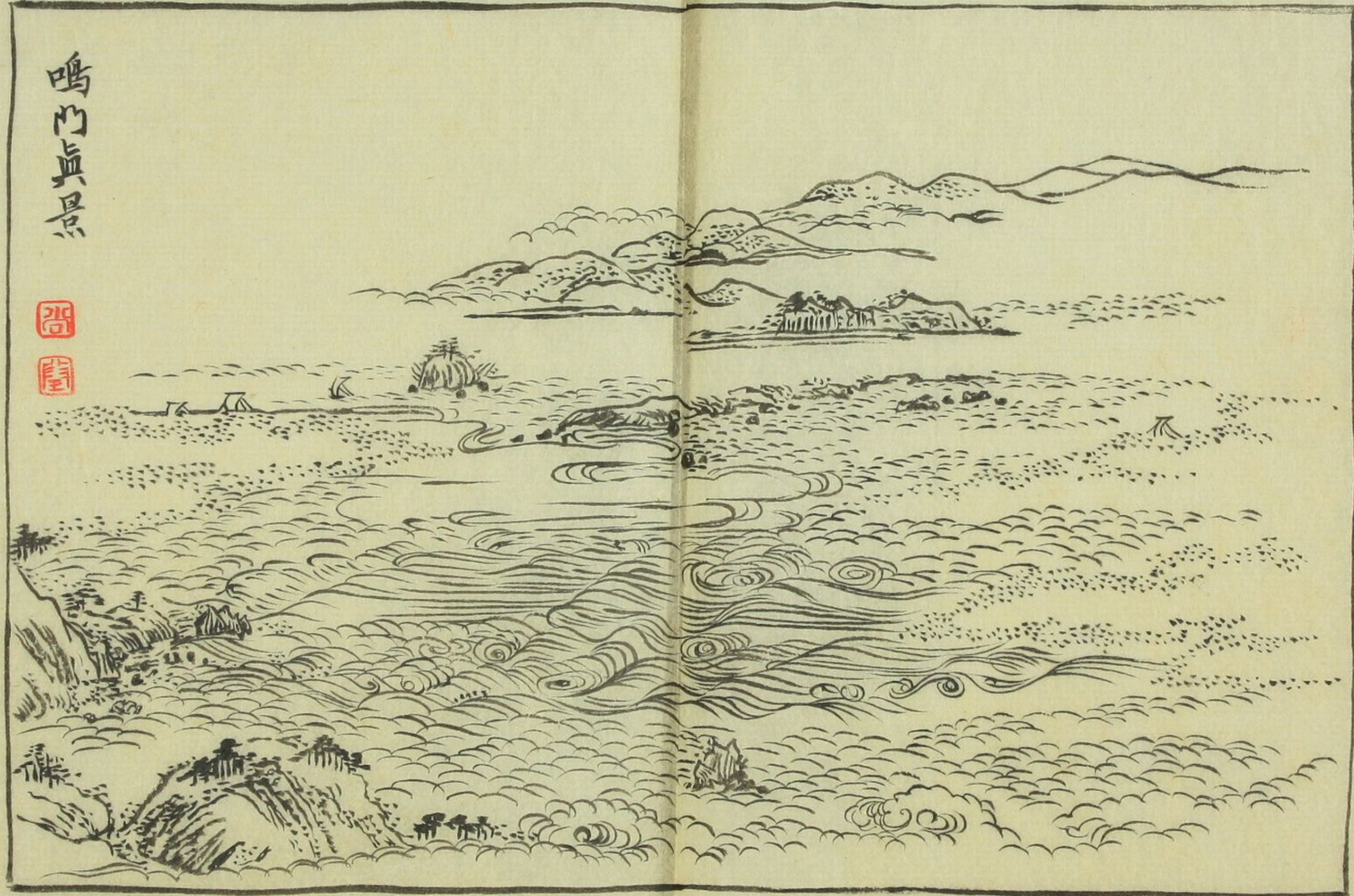
なぐさの浦とて

みるめゆる沼崎の浪よがろひひぬ沖より川のぬちとて
くさしとて

淡路

淡路の國とて友申こころめたりなるとに横並と
ふ星のやとてこころの鳴なりともいふ
あろり二所とていふる宮と松生ひいぬれり
中よわさき社有りそのやとていふと大や
尔と松の枝なりと枯水なる所此の一本の
こころ多るの年月を經ぬらぬとていふ
とるちのこころ或人の名つて今此家島と
いふとわさきののおのこころ島なりとて又いふ著

鳴門真景



せりゆく或人むねの國のほむふ(Com)らてあし
あしきむねは又よは沼島にふりてあし
家崎のふりてふりてあし
ふりてあしとふりてあし
ふりてあしとふりてあし

千早あふね代のおろそけぬまのちのちのちのちのち
福良の浦よちりてあし
つら行きて鳥取とらふちのちのちのち
れいりてあし高のちのちのちのちのち
まきあしとらふちのちのちのちのち
うさねとらふちのちのちのちのちのち

ふりてあしとらふちのちのちのちのち
ふりてあしとらふちのちのちのちのち
ふりてあしとらふちのちのちのちのち
ふりてあしとらふちのちのちのちのち

阿波

阿波のほ枝那郡なる撫養の海に二十餘り
四の里あり大のちのちのちのちのち
ふりてあしとらふちのちのちのちのち
治の浦遠より二里ありて入はめり水り岸
のちのちのちのちのちのちのちのち
ふりてあしとらふちのちのちのちのち

すてはやくふの本をきくつらきかよひ
なる深なりせんをとり折こふも
り吹おろした風もちる花にさねのう雪のふ
ゆまなきりしこの世といふ人の極も
南の海伊勢の山路もあひもあし路も
山高きとけの極を白雲の峰も
土佐

土佐
その人川をちる母

きくしるいふ物部川といふ
幸佐と小浦といふ
土佐のへはといふ
より三里は
—

かまのいふ八段といふ
紫津の浦と山宮の
色貝・極貝といふ
いふいふといふ
りけきといふ
ていふいふ長教
南の海土佐の
まりこといふ浦
はる中よ意國のよ

むろの濱をいへし思ふたにうらやまありて
かすかきもいへしあまの人のいふはるげ
は吾もていへしに思ふたに思ふたに思ふたに
花月をいへしに思ふたに思ふたに思ふたに
沖津浪よせし思ふたに思ふたに思ふたに
かすかきもいへしに思ふたに思ふたに思ふたに
つみきもいへしに思ふたに思ふたに思ふたに
らぶれし心もいへしに思ふたに思ふたに思ふたに
あまのいへしに思ふたに思ふたに思ふたに
つみきもいへしに思ふたに思ふたに思ふたに

家のいへしに思ふたに思ふたに思ふたに
思ふたに思ふたに思ふたに

あまのいへしに思ふたに思ふたに思ふたに

とよよ

海よよ不里すま来とあまのいへしに思ふたに
龍串のいへしに思ふたに思ふたに思ふたに
ほろの浪もいへしに思ふたに思ふたに思ふたに
あまのいへしに思ふたに思ふたに思ふたに
しよの名もいへしに思ふたに思ふたに思ふたに
あまのいへしに思ふたに思ふたに思ふたに
あまのいへしに思ふたに思ふたに思ふたに
あまのいへしに思ふたに思ふたに思ふたに
あまのいへしに思ふたに思ふたに思ふたに
あまのいへしに思ふたに思ふたに思ふたに



博多勝景
應子
海量尊者
之需



の井とゆへにそとく帯きの國にありぬ
よかこころをなほ

北國の春をいへぬの櫻花をいへぬ
三吉野の山をいへぬとあひひの桜の花を
宇佐の春をいへぬ

まねふとよめあつたゆのなほいへぬ
肥前

玉島川をいへぬ
しらぬの川の後をいへぬ
松浦川の春をいへぬ

あつたこころをいへぬ

湯のこころをいへぬ

久のこころをいへぬ

島原の春をいへぬ

島崎の春をいへぬ

肥後

阿蘇の春をいへぬ

つるまをいへぬ

あつたこころをいへぬ

つるまをいへぬ

あつたこころをいへぬ

あつたこころをいへぬ

あしあかきなまを三月までいひ
こふまけし煙をちたのちのち
さるまのちのちのちのちのち
いふことしちのちのちのちのち
うまに人せむそく何くさむと
すあかきまの浪のちのちのち

あまのぬよりゆか煙を目よりこく
あまのぬよりゆか

菩薩摩訶

天竺の半深の浦がうさつあ
うまのちのちのちのちのち

集人のあしあかきなまを三月までいひ

鹿見島あまのちのちのちのち

あまのちのちのちのちのち
あまのちのちのちのちのち
あまのちのちのちのちのち
あまのちのちのちのちのち
あまのちのちのちのちのち

あまのちのちのちのちのち
あまのちのちのちのちのち

あまのちのちのちのちのち

昭和十四年二月廿一日

漆山天童寫了

